

清水市次郎出版『絵本通俗三国志』の 挿絵についての考察

リョウ ウンカン
梁 蘊嫻

(一) はじめに

『絵本通俗三国志』（池田東籬 作・二世葛飾北斎 画）は、天保7（1836）年から天保12年にかけて出版された絵本読本である。本作は挿絵が400図を超え、江戸時代の「三国志物」の中で数量が最も多い作品である。明治時代になると、『絵本通俗三国志』は30種以上のバージョンが刊行された。活版の時代になった明治期には、本屋仲間の結束による保護出版が終わり、自由な競争出版の社会になったためである。

数多くの出版物の中には、二世北斎の絵を模写したに過ぎないものもあれば、斬新な挿絵を読者に提供しようと試みたものもある。明治15年に清水市次郎によって出版された『絵本通俗三国志』は後者である。本書は、口絵を大蘇芳年が手がけ、本文の挿絵は小林年参、水野年方が手がけた。これらの絵には、場面の選択にしても、構図にしても、二世葛飾北斎の挿絵と異なる箇所が多く見られる。このことから、古典としての『絵本通俗三国志』から踏み出し、独自性を出そうとした出版社の意図が窺われる。競争が激しい出版状況の中で、清水市次郎は購読の方法や斬新な挿絵など、さまざまな方面で新しいことを試みることによって、経営を成功させようとしたのである。本論文では、奥付や広告などの情報を解読することによって、清水市次郎の『絵本通俗三国志』の出版状況を明らかにする。また、その経営方針がどのように挿絵に反映されてい

るのかを分析する。

(二) 清水市次郎の予約出版

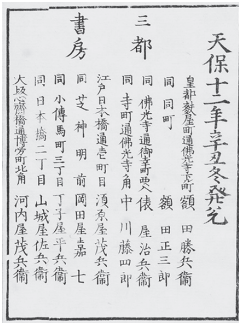


図1 ベルリン国家図書館蔵本

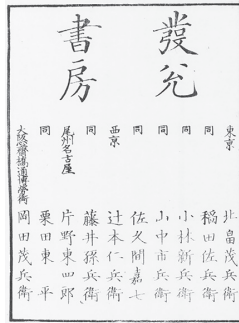


図2 東大図書館蔵本

天保年間に刊行された『絵本通俗三国志』の、明治以降における出版状況を見てみよう。ドイツベルリン国家図書館所蔵本の奥付(図1)と東大図書館所蔵本の奥付(図2)を見比べれば、東大所蔵本では、「江戸」「皇都」が、それぞれ「東京」「西京」に変えら

れており、書房の呼称も屋号から苗字に変えられている。このことから、東大所蔵本は明治期に入っても引続き印刷されたものであると判断できる。さらに、国会図書館デジタルコレクションの刊本を見れば、奥付は「和漢西洋 書籍売捌処 群玉堂岡田茂兵衛」(図3)とあるから、これも明治期に印刷・販売されたものであることがわかる。以上の検証によって、河内屋の蔵版は明治期になってからも、少なくとも二回刷られていたことがわかる。ここからこの作品は明治

の世になっても引き続き人気だったことが窺える。

岡田茂兵衛の木版本に加えて、明治に入ると活版印刷本が数多く出版されるようになった。明治期になって30種以上の出版物が刊行されたが、明治15、6年、わずか2年の間に、潜心堂、著作館、東京同益出版社、清水市次郎などの

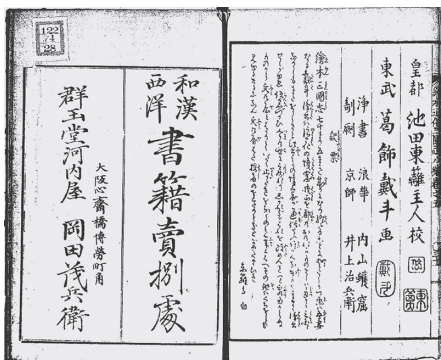


図3 国会図書館デジタルコレクション本

出版社が次から次へ『絵本通俗三国志』を出版し、競争の激しさが見て取れる。ここでは、清水市次郎出版『絵本通俗三国志』を中心に論じるが、その前に、上記の出版物を概観しておく。

まず、潜心堂版『通俗絵本三国志』を見てみよう。奥付によれば、出版人は士族の前田長善、発兌所は潜心堂である(図4)。該書上巻と下巻からなっており、出版年月はそれぞれ明治15年12月と、明治16年2月である。出版の間隔はわずか2ヶ月で、しかも完本である。このことから、潜心堂の出版資金は充分であったことが推測されよう¹。これと同じく明治15年12月に出版されたのが、著作館版『絵本通俗三国志』である。著作館版は、管見の限りでは3編の下までしか確認できていない。さらに、3編の下にきちんとした奥付もなく、著作館の名が見られないなどの点(図5)からみると、何らかの事情があって、著作館は最後まで刊行できなかったと推測される²。経営が成り立たなくなったのは、おそらくその経営手法とも関係していると考えられる。

明治15、6年頃、予約出版という新しい商業手法が流行っていた。予約出版とは「新聞広告によって遠方の購買者をも取り込み、事務手続きを経たあと送金小切手などと引換に通運などによって予約者の手もとに直接届けられる方法である」³。著作館もこのような経営手法を用いていた。奥付(明治15年12月出版発売)には「賛成員を募り廉価を以て之を頒んとする」とあるが、ここで見られる「賛成員」というのは書籍を予約する読者のことである。このような新しい手法は「予約者の予約金や前金によって書籍を制作するため自己資金をそれほど必要とせず、印刷の時点で発行部数を微調

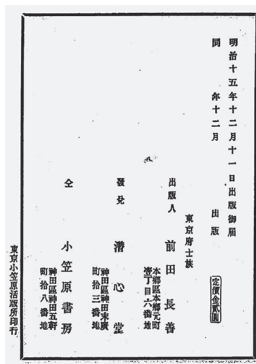


図4 潜心堂版

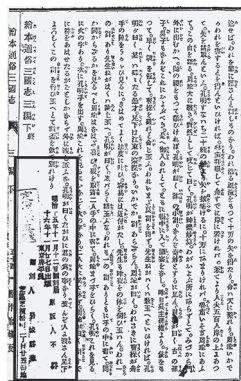


図5 著作館本

整できるというメリットがある一方、予約者が送金を止めたら元を取ることができず、完遂できなくなってしまうというデメリットもある」⁴。著作館の奥付に見られる、出版の遅延について読者に謝る内容⁵及び本が予定通りに印刷できなかったなどのトラブル⁶は、決して珍しいことではなかった。同じく予約出版を行った東京稗史出版社は活動期間が明治15年から明治18年までの、わずか3年間しかなかった⁷。こうして見ると、予約出版は膨大な資金を要しないため、出版社が立ち上がるのは簡単である一方、経営を持続させるのは難しかったようである。東京同益出版社も予約出版を行っていたが、該社が出版した『絵本

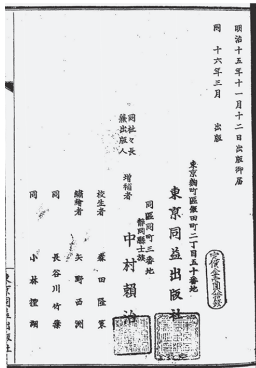


図6 東京同益出版社

通俗三国志』は静岡県士族中村頼治が社長兼出版人であった(図6)。筆者は2編(明治16年7月)までしか確認できていない。同社が明治17年7月に出版した『矢野文雄先生伝』の広告で「頭書増補絵本三国志合五拾冊初編式編製本済全部金六円」と書かれていることから、明治17年7月の時点、第3編はまだ発売されていないことがわかる。これも出版が打ち切られた可能性がある。

清水市次郎も同じく予約出版であったが、そのやり方は、著作館と東京同益社と若干異なっていた。清水市次郎は『絵本通俗三国志』『絵本忠義水滸伝』『絵本西遊全伝』など数種の作品を一つの出版物にまとめて、月に3回か4回、もしくは6回のペースで出していた⁸。一回の分量はおおよそ9枚であり、各作品はそれぞれ一話を掲載する。定価は1冊4銭とある⁹ように、4銭を出せば3種の小説が読めるというのは、読者にとってはかなりお得感があったことだろう。これを『平仮名絵入咸唐題庫』と命名し、連載小説のように少しずつ読者へ届けるようにした(図7)。



図7 『咸唐題庫』

『咸唐題庫』の序は高畠藍泉こと三世柳亭種彦が書いたものであり、命名の理由を以下のように説明している。

咸唐題庫序

あなめづら高麗もろこしの諸葛が攻めの鼓を今見つるかも。と万葉体の歌ハ。屋代弘賢大人が好古の癖ありし故に。或骨董家が。此ハ孔明の陣太鼓なりとて。携へ来れる物を見て詠たるなり。弘賢大人ハ古書をも愛でて。保存の法に意を尽し。謄写させたる書も多かりしが。近世活字の自由を得てより。古書を再版する者数部なるが中に。通俗三国誌。水滸伝。西遊記の。三書を合併て。雑誌となし。咸唐題庫と題したる。序文を僕に記てよと。請求められて熟々思へバ。臥龍先生。呉学究。金角銀角両大王が。攻鼓をかんから太鼓に換しハ。西京浪華の地方にて。角觥と劇場の報告に因しものか。東京にてハ此物を。かんから太鼓と称へて。放下師や輕業の。囃子ならでハ用ひざるを。京坂にてハ甲太鼓といひ。大太鼓のドンドンに換トテトテと打鳴らして。興行始めを四方に告る。故に僕が秃筆を。咸唐題庫の撥に換へ。清国の戦闘と印度の仏説が。弥々始りさやうじやと。評判を喝する事しかり

明治壬午四月　　柳亭種彦誌

このように、『咸唐題庫』を「かんから太鼓」に喩えているのである。筆を撥に換えて、太鼓で賑わわせながら、読者の注意を集めるという意図があっただろう。わざわざ作家に序を書いてもらうのも、売り出そうとする意気込みの現れだろうか。じっさい『咸唐題庫』は、販売促進のために、しばしば購読者の要望に応じている。たとえば、第4号の広告に見られるように、『西遊記』では挿絵を加えることや、後に合本する際に読みやすくするために、各号の頁数を一からではなく、前号の続きに足していくことにする、などの決議がなされたようである¹⁰。これはどちらも、読者に応えた結果なのであった。また、『咸唐

題庫』第6号の広告には、

本誌以後十五冊毎に合本に致す目的なれば左の雛形にて製本仕つり候に付き豫じめ前以て御報知申し上候。

右合本の模様は人物肖像の口絵（大蘇芳年画）に彩色を入れ且新型の磨き表紙を製し蒲色角包紫色の糸に黄唐紙の見返し紅唐紙の外題を添へ美麗に仕立て代価一冊三錢ヅ、にて引受申し候間右御読溜の花主ハ弊家或ひハ法木方へ御持込次第早速調進差上申すべく候也。

とあるように、後にバラバラに刊行したものを出版社自身が製本し、表紙及び口絵を付け加える。さらにその口絵は、大物の大蘇芳年に頼む、と謳っている。これもやはり他社の出版物より品質のよいものを提供しようとする意図だと考えて良いだろう。以上のような新しさがあったためか、予約購読開始時は売り切れたほどの人気だったようである。そのためか、発売頻度がまもなく毎月3回発売から4回へと増やされることになった¹¹。のちには、銅板彩色摺の地図も付け加え、かなり凝った製本になった¹²。

（三） 予約出版継続の困難

ところが、清水市次郎の意気込みとは裏腹に、職工の方には時々トラブルが起こったようである。『咸唐題庫』第12号の広告によれば、職工が熱中症になって、仕事が遅れるということが時々起こった。欠本の作成に追われて、新しいものが時間どおりに作れなくなったため、さしあたって月3回発行のペースに戻った¹³。『咸唐題庫』は16号ごとに製本のサービスが行われているが、読者の手元にあるものは皺だらけのものが多く、それを直すのにかなり手間がかかったようである。製本に手間がかかり、職工の給料も上げなければならなくなっただろう。そのためか、製本料金は値上がることになった¹⁴。

第26号では、新年（明治16年）の挨拶として、活版所と契約が確定したので、

引き続き購買を願うと書かれているが¹⁵、注目したいのは出版人が変わったことである。これまでの奥付は次のようなものであった(図8)。清水市次郎が編集者兼出版人で、法木徳兵衛が大売捌であった。ところが、26号の奥付では図9のとおりである。出版人が法木徳兵衛になったことが分かる。値上げしなければならなくなったという事情を勘案すれば、おそらく清水市次郎は自分の力では経営を成り立たせられなくなり、法木徳兵衛に経営を委ねたのであろう。

第31号からは、製本を看可楽堂という業者が担当することになった(図10)。32号から46号までは、広告も奥付もないまま刊行された。

この期間は、おそらく出版の経営について清水市次郎が悩んでいただろうと思われる。というのは、第61号になると、次のように大きな変更が見られるからである。看可楽堂は製本所であるはずなのに、「右賛成御申込の御方ハ前金受取並びに配達とも弊家より差出し申すべく候但し売捌所へも同断式十銭にて売渡し申候に付御申込之なき方ハ幾分か高価に相成申すべく候に付成丈け弊家へ御申込有之度候也」という内容を見れば、その書き方は出版者の立場からのそれである。第62号（図11）に至って、看可楽堂は出版元も兼ねるようになったのである。この看可楽堂の来歴について調べても資料が出てこないが、明治17年出版された『新撰咸唐題庫』の奥付（図12）が参考になる。清水市次郎の住所

明治十五年四月六日出版御届
東京府學民編輯出版人
芝區愛宕下町四丁目三番地
每月四回出版
清水市次郎
大賣捌
法水德兵衛
元大坂町十一番地

図8 『咸唐題庫』
第24号

大 賣 劔	飯田町三丁目 神田越中町 柴井町十六番地	武田 平 浩 堀 可 樂 堂
明治十五年十二月十五日出版 對局	毎月四圓〇九日〇十日〇十五日〇二十日出版	
編輯人	東京府南區氏 東京芝公園下町四丁目東京 齋地	
出版人	東京日本橋區元大坂町十一番地 法 本 徳 芸 術	

図9 『咸唐題庫』第26号

[illegible]

図10 『咸唐題庫』 第31号

が「芝露月町三番地」に変わっている。第64号（図13）に載る看可樂堂の住所と同じであることを考慮すると、清水市次郎が看可樂堂という店を立ち上げて、法木徳兵衛の手から出版権を取り戻したものと考えられる。法木徳兵衛は大正4年の時点で、まだ出版物が見られるため、経営を終わらせた訳ではなかったらしい。「是迄売捌所の中往々代価の滞り有之夫が為会計上大いに不都合を生じ候に付き」（第62号）とあるように、法木徳兵衛との間にトラブルがあったと推測される。法木徳兵衛の協力がなくなって、経営も厳しくなったと想像される。

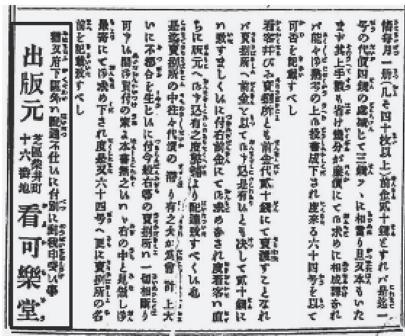


図11 『咸唐題庫』第62号

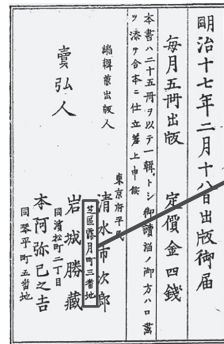


図12 『新咸唐題庫』第1号



芝露月町三番地

図13 『咸唐題庫』第64号

清水市次郎は、月に6回の出版の大変さを実感し、第61号では、月1回に減らす計画を読者に相談した¹⁶。月1回の出版で経営は成り立ったのだろうか。第62号には「絵本通俗三国志 合本十五冊 一冊前金貳十銭 定価三十銭 既に四冊出版」という広告が見える。これによれば、合本15冊を前金で計算すると、3円（15冊×20銭）になる¹⁷。潜心堂の4円¹⁸、東京同益出版社の6円¹⁹、著作館の5.25円（15冊×35銭）²⁰などに比して、かなり安くなっているといえる。じっさい第62号の広告では次のように、月1冊の刊行は値段的に安いということを強調して、読者を勧誘している。

諸毎月一冊（凡そ四十枚以上）前金貳十錢とすれば是迄一号の代価四錢の
 処減じて三錢ツゝに相当り且又本もいたまず其上手数も省け幾分が廉価に
 て御求めに相成訳なれば能々御熟考の上御投書成下され度来る六十四号を
 以て可否を記載すべし。

看客並びに売捌所とも前金代貳十錢で売渡すことなれば売捌所へ前金を以
 て御申込是有候とも決して貳十錢にハ致すましく候に付右前金にて御求め
 なされ度看客ハ直ちに版元へ御申込有之度弊舗より配達致すべく候也。

是迄売捌所の中往々代価の滞り有之夫が為会計上大いに不都合を生じ候に
 付今般右等の売捌所ハ一切相断り可申候間御買付の家に本書無之候ハ右
 の中と見做し御最寄にて御求め下され度は又六十四号へ更に売捌所の名前
 を記載致すべし。

この引用でもう一点注目されるのは、売捌所へ求めるより版元へ直接買った
 方が安いと念を押していることである。売捌所に多々不満を持っているような
 発言である。上記の経緯で、『咸唐題庫』は第65号をもって停刊したようだ。第
 65号が出版されたのは、明治16年7月ごろだろう。ちなみに、第65号までに『咸
 唐題庫』は4回の合本作業を行ったが、そのたびに、『三国志』『水滸伝』『西遊
 記』をそれぞれ合本の形で本を改めて、出版するという事も行っていた。下
 記の表を見れば、一目瞭然である。

『咸唐題庫』（雑誌として出版）			『絵本通俗三国志』（本として出版）		
号	出版御届 年月日	編輯者 出版元	冊	出版御届 年月日	編輯者 出版元
1-25	15.4.6	編輯出版人：清水市次郎 大売捌：法木徳兵衛			
26-47	15.12.15	編輯人：清水市次郎 出版人：法木徳兵衛	1	15.10.25	編輯出版人： 清水市次郎 大売捌：法木徳兵衛
48-49		未見	2	16.3.25	
50-60		奥付なし	3	16.7.7	

『咸唐題庫』（雑誌として出版）			『絵本通俗三国志』（本として出版）		
号	出版御届 年月日	編輯者 出版元	冊	出版御届 年月日	編輯者 出版元
61-65		出版元：看可楽堂	4	16.8.27	和解者兼出版人： 清水市次郎 発兌元：看可楽堂
			5-8	16.8.27	
			9-10	16.12.17	
			11	16.12.17	和解者兼出版人： 清水市次郎 発兌元：菱花堂
			12-17	17.6.11	和解者： 清水市次郎 出版人：武田平治 発兌元：菱花堂

この表の要点を整理しておこう。1冊から3冊まで、清水市次郎は編輯出版人という立場であり、法木徳兵衛は大売捌となっていた。4冊目から10冊目まで、清水市次郎は和解者並出版人となっており、発兌元は看可楽堂である。前述したとおり、清水市次郎の住所と看可楽堂の住所は同じ「芝露月町三番地鉄道前」となっているため、看可楽堂は清水市次郎が経営した出版社だと推測できる。ところが、どういう訳か、清水市次郎は11冊目（すなわち明治17年の前半時期）から、自分が和解者を務め、出版の経営は菱花堂に委ねた。一方、清水市次郎は明治17年2月の出版御届で『新撰咸唐題庫』という雑誌を編集し出版していたのである。清水市次郎が経営したと思われる看可楽堂は見られなくなったが、明治20年の時点で、清水市次郎が編集した作品は出版されていたのである。その間、さまざまな出版社と提携したと見られるが、法木徳兵衛と組むことはなかった²¹。いずれにせよ、このように、清水市次郎は、出版元を何回も変更し、雑誌の形態（『咸唐題庫』）を経て、なんとか『絵本通俗三国志』の全作出版を完遂した。

菱花堂は、論者が調査した限りでは、明治16年から明治20年まで活躍していた出版社であるが、『栗原百介の伝 忠義美談』（明治16年12月）などの作品を出版した。三国志関係でいえば、清水市次郎『絵本通俗三国誌』のほかに、『絵

本三国志小伝』（明治18年3月、編輯兼出版人武田平治）がある。資金は豊かだったかどうか不明だが、菱花堂の経営に移るとともに、絵師は年参から年方になった。清水市次郎『東京流行細見記』（明治18年7月、武田平治発兌）に掲載の浮世絵師の番付によれば、「芳年、年方、年参」

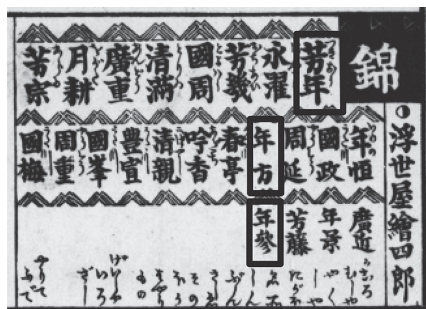


図14 『東京流行細見記』

の順となっている（図14）。菱花堂は格上の年方に挿絵を依頼したことになる。常識から考えれば、代金も年参より高かっただろう。このことから、菱花堂は清水市次郎から依頼された『絵本通俗三国志』の出版を大切に考えていたことがわかる。

以上、資料を読むことによって、経営のさまざまな事情を浮き彫りにすることができた。もちろん、まだ不明なところもある。ただ一つ言えるのは、当時出版社の経営は大変で、資金や職工の問題で、休業し、もしくは倒産した出版社も多くあったが、清水市次郎も同じ問題に遭遇した、ということである。しかし自分の力では経営できなくても、別の出版社に力を貸してもらうということで、最後まで出版を成し遂げることができたのである。

（四） 挿絵から見る清水市次郎『絵本通俗三国志』の独自性

次、挿絵の観点から清水市次郎『絵本通俗三国志』の独自性について分析する。だがその前に、別の出版社の挿絵を概括的に説明しておきたい。

前述したとおり、天保年間に出版された『絵本通俗三国志』（池田東籬作、二世葛飾北斎画、河内屋茂兵衛、後に岡田茂兵衛）の挿絵は一時北斎の筆だと思われていたが、実際には二世北斎の作品であった²²。明治時代に出版された三国志物の多くは二世北斎の挿絵を模写したものである。たとえば、潜心堂版『通俗絵本三国志』は二世北斎の挿絵を模写したものであるが、数量は岡田茂兵衛



図15 岡田茂兵衛版



図16 潜心堂版



図17 岡田茂兵衛版



図18 潜心堂版

板の挿絵を四分の一までに減らしている。また、歌川芳春署名の絵は11図あり、竹葉（長谷川竹葉）の名前が見える絵は3図ある。

このうちのいくつかを具体的に比較してみよう。まず「桃園結義」の挿絵（図15、図16）を見比べれば、両者の構図はほとんど同じと言ってよいが、絵の細部が所々異なっている。たとえば、張飛の顔が面長になったり、関羽の頭巾が変わったりするところ。面白いのはこの絵が「竹葉」と署名入りなことである。

次に、関羽が曹操のところを去るとき、餞別として曹操にひたたれを受け取る場面を見てみよう。図17が岡田茂兵衛版であり、図18が潜心堂版である。両者は構図が明らかに違う。実は潜心堂版は歌川国芳が描いた浮世絵を真似たものである（図19 通俗三国志 関羽五関破 歌川国芳画）。潜心堂版は基本的に岡田版の挿絵を踏襲しながら、場面によっては人気の浮世絵の図柄を利用している訳である。

つづいて、東京同益出版社版を見てみよう。東京同益社の最も大きな特徴は、頭注が付けられていることである。たとえば、「蒼天已死、黄夫当立。歳在甲子、

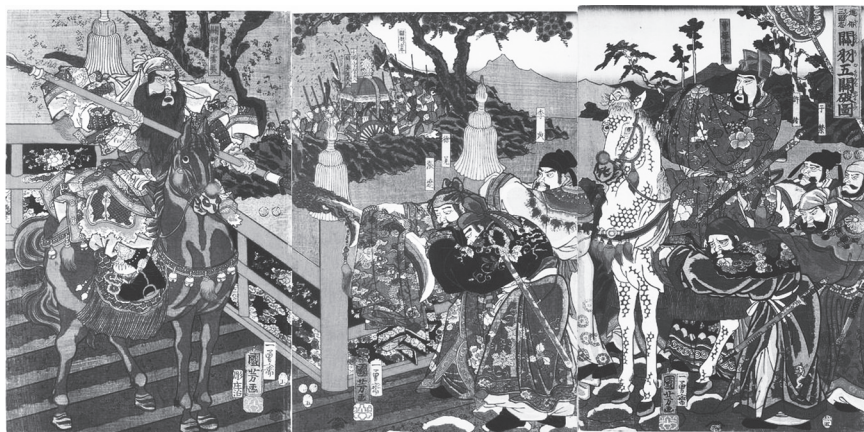


図19 通俗三国志 関羽五関破 歌川国芳画

天下大吉」とある箇所に対して、「黃夫恐クハ誤リナラン清本黃天ニ作ル」と注釈がつけられている(図20)。増補者の中村頼治は清本及び正史の『三国志』を照らし合わせて、本文に説明を加えるという作業を行った。頭注をつけたのは知識層の読者への販売を見込んでいたためと考えられる。また、「版面製本美麗なるは旧本に優れるとの高評を蒙り」(二編卷之一の奥付)とあるように、製本の美しさを追求している。さらに、「挿画ハ毎冊四図或ハ、五図文字ハ弘道軒清朝活字ヲ半紙拾貳行ニ印刷シ」(二編卷之三の奥付広告)と、本書の字体も風変わりなものが採用されている。挿絵については、

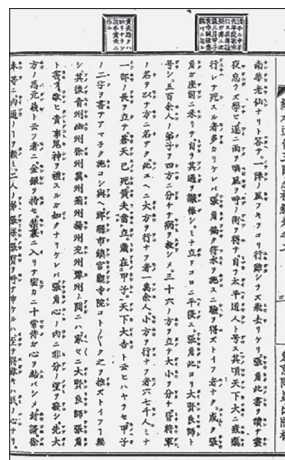


図20 東京同益出版社版

此書ハ通俗三国志へ矢野西洲及小林稜湖の筆にて画像及種々の挿絵を加へ旧本に優れる者を出版す

とに、矢野西洲及び小林稜湖が画工を担当していると記し、これまでの書籍より優れた本であることを強調している。矢野西洲は同社が出版した『絵本太閤記』（明治15年12月）の絵師でもあり、小林稜湖は同社出版の『皇朝烈女伝』（明治17年2月）にもその名前が見える。二人とも、東京同益社の仕事によく携わっている絵師であった。口絵（図21、図22）を見れば、岡田版とまったく異なったものとなっており、古典としての岡田版の挿絵に区別をつけようとしていることが窺われる。本文の挿絵は岡田版を模倣するものである。しかし両者（図23、図24）を見比べてみれば、炎の描き方の違いから、同じ版ではないことがわかる。



図21 岡田茂兵衛版



図22 東京同益出版社版



図23 岡田茂兵衛版



図24 東京同益出版社版

さらに、著作館版について見てみよう。著作館の口絵は、潜心堂のようにそのまま模写するのではなく、人物の配列を変えたりすることがある。また、挿絵の大きさも、岡田板が見開きで掲載していたのに対し、版面の四分の一、もしくは二分の一に縮小させている。図25と図26を見比べれば、構図は岡田板を参考に行っていると思われるが、描き方は岡田版ほど丁寧ではない。高品質を求めている潜心堂及び東京同益社に比べると、著作館は、当時流行していた新聞小説に類似していると言えるだろう。



図25 岡田茂兵衛版



図26 著作館版

以上の作品は、それぞれ自分の独自性を出そうとしているのだが、結局、岡田版のスタイルの域を出ないものばかりであった。ではこれらに対し、清水市次郎『絵本通俗三国志』はどうだったのだろうか。該書の口絵（図27）は芳年筆であり、人物の描き方はこれまでの岡田版を模写した挿絵とは大いに異なっている。本文の挿絵は前半部分が小林年参、菱花堂の経営になると、水野年方の担当に変わった。清水市次郎版は、版面が上下二段組になっており、挿絵は版面の四分之一しかない。挿絵にする場面の選択は従来のものと異なってい



図27 清水市次郎版

るし、また同じ場面を描くにしても、構図が異なっている。この辺りに、岡田茂兵衛板系統の挿絵と差異化を図ろうとする意図が窺われる。

もう少し具体的に見ていこう。清水市次郎の挿絵は大体三種にまとめることができる。(1) 岡田茂兵衛版（すなわち二世北斎の絵）と同じ場面に絵をつけるが、構図は二世北斎の絵と異なっているもの。(2) これまで、挿絵として描かれていなかった場面が挿絵化となったもの。(3) 二世北斎の構図を簡略したもの、である

まず(1)の挿絵を見てみよう。たとえば、南華老人が書を授ける図である。潜心堂版、著作館版、東京同益出版社版が二世北斎の絵の構図をそのまま真似しているのに対して、清水市次郎版は伝統的な構図とは異なったものにしている。岡田茂兵衛版（図28）では、巻物を開いて読み上げる老人と、正座して巻物を受取る張角が描かれている。これに対して清水市次郎版の絵（図29）では、老人も張角も巻物を手に持っていない。



図28 岡田茂兵衛版



図29 清水市次郎版

もう一つ(1)の例として、孫堅が石に投げられ死んでしまった場面を見てみよう。二世北斎の絵（図30）では、孫堅が落石の中を走る光景が描かれていたが、清水市次郎版（図31）では、孫堅が大きな石につぶされたように描かれている。細かいところで、原作との違いを出そうと工夫している様子が見て取れる。



図30 岡田茂兵衛版



図31 清水市次郎本

(2)の、これまで描かれていなかった場面を挿絵化した例も多く見られる。たとえば、「曹操董卓を殺さんとす」(21頁)、「曹操誤つて呂伯奢を刺殺す」(23頁)、「呂布虎牢関に三戦す」(26頁)、「曹操が徐栄に追われる」(29頁)、「董卓王允の家に貂蟬を見る」(41頁)、「北掖門に呂布董卓を刺殺す」(44頁)、「李催郭汜司徒王允を殺す」(44頁)、「関羽管亥を斬て北海の囲みを解」(55頁)、「曹操怒て玄徳の使を罵る」(58頁)、「許褚怪力奔牛を引戻す」(63頁)、「曹操清水に典韋の霊を祭る」(100頁)、「沮授天文を是て袁紹を諫む」(173頁)、「公孫康討て袁尚袁紹を斬」(196頁)、「曹操戟を横へて詩を賦す」(267頁)、「曹操楊修を殺す」(397頁)などの場面である。この中で、一、二例をあげて説明しよう。

傍線部「曹操清水に典韋の霊を祭る」(図32)は曹操が部下の典韋を追悼する場面である。この絵に対応する内容を引用してみよう。



図32 清水市次郎版

去年此処にて戦ひし時典韋我を救ふて討死せり此を思ふて哭くなりとて頼りに涙を流しければ聞人皆感嘆す暫く水辺に陣を居て牛を宰馬を殺して祭を設け再拝して典韋が魂ひを招き声を放つて哭きければ大小の将士皆涙を

流す。



図33 岡田茂兵衛版

戦死した大将を思い出して悲しみを新たにする曹操の心情が描かれている。ここに焦点を当てて挿絵を付するのは、戦の場面ばかりではなく、曹操の知られざる心優しい一面を強調しようとしたからではないだろうか。典韋の勇戦姿

(「典韋敵二十余人を斬て煙中に忠死す」)(図33)を描いた岡田版とは異なる作品を作ろうとした意気込みは、ここからも見えるのではないだろうか。

(3) の、岡田版系統を模倣したと思われるものも、当然ながら数多く見受けられる。古典としての『絵本通俗三国志』から離れようとするように努力しながらも、構図を真似てしまうこともあった。たとえば、図34と図35はその典型的な例であろう。

興味深いことに、原作を真似する挿絵は、第8冊以降よく見受けられる。それはおそらく出版に間に合わせるために、時間が足りなかったからだろう。も



図34 岡田茂兵衛版



図35 清水市次郎版

しくは、まだ修行の足りない、無名な絵師に描いてもらったためかもしれない。

ところで、11冊から経営権が菱花堂に変わるとともに、絵師は水野年方になった。年方は当時有名な絵師であるだけに、挿絵も非常に丁寧に描かれており、すべての挿絵に年方の署名が



図36 清水市次郎版



図37 清水市次郎版

ある。例として、「孔明孟獲を生捉」（図36）「老将趙雲奮戦して敵の心を寒がらしむ」（図37）をあげておこう。年方の挿絵から、菱花堂が品質のよい出版物を作ろうとする意図が窺われるだろう。

（六） おわりに

見てきたように清水市次郎は大変出版に熱心な人物であった。当時の予約出版が、資金の関係で刊行を中止することはよくあった。しかし清水市次郎は安い値段で、なおかつ新しい発売方法によって、読者を獲得した。また、自分で出版社を経営し、資金の問題にも遭っただろうが、菱花堂の協力を得、またさまざまな解決法を考えて、最後まで出版を成し遂げたのである。清水市次郎出版『絵本通俗三国志』は、後の「三国志物」にも影響を与えていた。これについては、また別稿で論じたい。また、明治期に出版された『絵本通俗三国志』を系統的に整理し、分析することは、今後の目標である。

【註】

潜心堂版、東京同益出版社版、著作館版、清水市次郎版の図版は、すべて国会図書館デジタルコレクションによるものである。ベルリン図書館所蔵本『絵本通俗三国志』の図版はDigitalisierte Sammlungenというサイトからダウンロードしたものである。

- 1 明治17年に、文事堂によって出版された『絵本通俗三国志』は潜心堂の版をそのまま譲り受けたものだと見られる。このことについては、また別稿で論じたい。
- 2 3編下の出版年は明治16年11月であるが、著作館の同時期のほかの出版物には『南総里見八犬伝』と『昔語質屋庫』があり、いずれも明治16年11月をもって打ち切れ、それ以降の出版物は見受けられない。『絵本通俗三国志』『南総里見八犬伝』の翻刻人は岩城勝蔵であるが、岩城勝蔵は後にいくつかの作品を出していた。たとえば『佐倉宗吾譚』『於染久物語』『石川五右衛門一代記』『鬼神於松一代記』『新版曾我物語』『越後伝吉物語』『新板一口咄し』などの作品はいずれも明治18年12月に出版されたものである。また、奥付には、「芝愛宕下町四丁目一番地 編輯兼出版人 岩城勝蔵」とあるが、このことから岩城勝蔵が自分で編集し、出版したということがわかる。明治16年11月以降、著作館と提携した形跡はない。これらのことから、著作館は経営を中止したと推測できる。
- 3 磯部敦『出版文化の明治前期 東京稗史出版社とその周辺』（ぺりかん社、2012年）14頁。
- 4 前掲書、14頁。
- 5 「稟告 予て諸新聞紙上を以て御報道申候絵本通俗三国志初編製本出来に付本日より遠近の賛成員諸君へ御送本申上候将本書出版之儀之外に遅延候共爾來は手配之上迅速出版發行相成候様可仕候間幸に涵海是祈る同式編は本月中旬發行的筈南総里見八犬伝初輯ハ已に出版同式輯 同本月中旬發行可致候事」（著作館奥付、明治15年12月出版発売）。
- 6 稟告 南総里見八犬伝三輯絵本通俗三国志初編下本年一月早々出版發行可仕旨御報道申上置候処同月ハ休日多く且は職方に於ても臨時休暇を乞ふ等勞業務輕忽に相渉候ては却て不都合の儀と存じ出版を見合候段賛成各位に對し其御答を拜謝する処たり依ては兩書共愈製本出来に付本日より遠近の賛成員諸君へ御送本申上候将示來ハ兩書共毎月無相違逐次出版仕候間此段宜く御承引可被下候（著作館奥付、明治16年2月出版発売）。
- 7 磯部敦前掲書、8頁。
- 8 第1号から第7号まで月に3回、第8号から第12号まで月に4回、第13号から第16号まで月に3回、第17号から第46号まで月に4回、第47号から第65号まで月に6回、發行する。
- 9 第1号の奥付に「定価 一冊金四錢〇十冊前金三十六錢〇二十冊前金六十八錢〇五十冊前金一圓六十五錢〇百冊前金三圓廿錢 府外遞送ハ一冊毎に郵税壹錢申請候」とある。
- 10 「愛看諸彦より種々御忠告の投書中今般多数に決し（議長擬して）たる分当第四号より左に改定仕候。一 西遊記ハ四号目或ハ五号目毎に挿画を加へ候事。一（三国志の続き）（水滸伝の続き）等の一行を省き欄外へ書名を出し丁数ハ一二三とあれば次号ハ四五六とし漸々十百と丁数を相進め（即ち当四号ハ一号より追來れば十一十二となれば本号より改む）。御読溜の後一書ツ、合本にして都合宜敷様相改め候事」（『咸唐題庫』第4号）。
- 11 「本誌第一第二第三の三号既に売切れ候に付き不日順序を逐て再版仕り候間未だ御手に入ざる看客ハ暫時の間御待下され候様願ひ上奉ります。就いてハ來月より毎月四回ツ、發兌いたす事に極ました」（『咸唐題庫』第7号）。
- 12 「本誌合本調進代価ハ（第六号広告雛形の通）一冊三錢ツ、にて引受申べく豫て廣告致し候処三国志の一書ハ更に銅板彩色摺の地図を相加へ候間右一書ハ四錢餘ハ三錢ヅ、メて十錢にて美麗に仕立て差上候」（『咸唐題庫』第14号）。
- 13 「本誌ハ先月より四回宛發兌の趣き豫て廣告致し候処目今炎暑中にて職工中暑に当候者多く夫故延引仕り候附てハ最早合本の期も近づきにあれば一二三六等の号欠本多く再々御督責に付右の号数に取掛かり候間來月迄ハ矢張従前通り三回ツ、出版致し欠号相済次第四回ヅ、ハ相違なく發兌致し尚又西遊記の紙数を相増べく様御促しの諸君多分之あり候に付第二十一回より共に三枚ヅ、十枚とし定価を金五錢に相改御申べく候間相替らず御愛看を願ひます。咸唐題庫 第一号 第二号再板 八

月廿五日出来」(『咸唐題庫』第12号)。

- 14 「○製本料直増広告 本誌製本ハ是まで十銭にて仕立差上候処尋常でさへ四隅の捲上りを一々焼泥鍋にて皺を伸す位の処中にハ殊に皺苦茶だらけにて実にも附られぬのを御遣しなされ格外手数相掛り甚だ難渋致し候得ども引続き購求下され候御花主ゆゑ其義務として低価を以て仕立差上候得共最早本年も日数僅かに相成来月に至れば職工の手間等も直上に相成候に付本月中に御遣しの御方ハ従前通りの代価にて引申請候得共来る十二月一日より以後ハ左の通り直上仕候間成丈け本月中に御遣はしの方御徳用に存じます。三国志(六銭)水滸伝(五銭)西遊記(四銭)メて十五銭也。但し口絵并に付属物(表紙を省き)ハ従前通り七銭なり」(『咸唐題庫』第22号)。
- 15 「へい新年の御慶申し上ます相替らず御愛顧の程偏へに願ひ上奉つります諸旧年ハ再々出版の時期に後れ何共恐縮仕り候本年より八月々四回ツ、間違なく出版致し候様活版所と確然契約仕候に付引続き御購求の程奉希候」(『咸唐題庫』第26号)。
- 16 「第四合本(即ち六十四五号)にて月々六回の発兌を一旦中止し更に毎月各書一冊ツ、に纏め是迄合本の通り口絵を添へて出版し右三書を一書ツ、離して売捌き然して各一冊の紙数凡そ四十枚以上と見做し賛成員へハ一冊前金式十銭ツ、にて差上申べく夫に付三書とも毎月出版致候てハ却つて御求め悪き方も可有之に付西遊記の一書ハ後へ廻し水滸三国の二書何れか全備の上直ちに西遊記に着手すべければ先差当り右の二書を一冊ツ、毎月相違なく出版可仕候依て是迄毎月売高の半数賛成員之あり候ハ急速決定仕り候に付甚だ御手数ながら当た六十四号(本月十五日)出版までに賛成の御方ハ郵便はがきを以て右二書或ひハ一書とも御望みの表題を書添御投書被成下度奉願上候若賛成員半数に至らざるときハ矢張従前の通り発兌仕り候事」(『咸唐題庫』第61号)
- 17 実際は17冊で完結することになったのだが、それでも他の出版物と比べれば、安価である。17冊の場合は、 $17冊 \times 20銭 = 3.4円$ 。
- 18 奥付に「定価金式円」とあるので、上下2巻で4円になる。
- 19 初編に「1円80銭」とあるが、2編巻之1の奥付に「一 頭書増補 絵本通俗三国志 全部合冊五十冊從初編至五編各十冊宛(書肆沽価の画本金八円八十銭)本社出版の新書定価金六円」とあるので、全作刊行した場合は6円で販売する見込みだろう。
- 20 著作館は奥付に「定価三十五銭」とあるが、予定どおり15冊全部刊行された場合、値段は $15冊 \times 35銭 = 5.25円$ になる。
- 21 清水市次郎の出版物で、法本徳兵衛が大売捌となったのは、『咸唐題庫』のほかに、『真久楽双誌』(明治15年5月出版御届)があるが、いずれも明治15年までの提携であった。
- 22 「此節門人戴斗の画を北斎と唱へ候由、是は新吉原亀屋喜三郎と申者へ、三十年以前ゆつり遣し候、漫に戴斗の画を、北斎と申ふらし候儀、甚不埒之儀、能々御吟味被下度……(後略)」(飯島虛心『葛飾北斎』から引用)。

* 討論要旨

山本和明氏は『咸唐題庫』に関する合本の問題について、既に購読している人たちが購読したものを送れば合本するとしたが、状態が良くないものを送ってくるため困るという記事が『咸唐題庫』に書かれていることを指摘し、『咸唐題庫』の雑誌から合本になったものと、予約出版で出版されたものは異なると考えられるので、その辺りも検討した方が良い、と指摘した。

付言 1 本研究は、2017年度台湾行政院科技部研究計画による研究成果の一部である。(「江戸時代讀本研究：《繪本通俗三国志》所呈現的中國」、研究番号：106-2410-H-155 -004)

付言 2 表題と発表内容には一部異同がある。